硬式庭球部

設 立	1949 年
部 長	今井 宏明（応用化学科）
現在の部員数	39 人（2013 年 4 月現在）
OB/OG 会代表者	坂井 克郎
OB/OG 会会員数	969 人
部 誌	年 2 回発行
U R L	http://rikotai-tennis.net/

創部時代の思い出

1941 年 4 月に藤原工大鍛錬部（現在の理工学部体育会の礎）庭球部が、酒井部長のもとに活動を開始したとの記録がある。練習はおもに第一生命の新丸子コートや、王子製紙の富士見ヶ丘コートで行われ、部員数も多く、対外試合も行われ、活動は活発であったと、1942 年 12 月までは記録が残っている。しかし、太平洋戦争により部員同士が離散してしまい、その後 6 年間の活動記録は失われている。こうして、藤原工大庭球部からの継続性は途切れてしまったが、慶應工学部が小金井に移転完了した 1949 年、現在の硬式庭球部へと続く活動が端を発した。

小金井時代

テニスコートの建設

1949 年、山室保之（10C）が、小金井のテニスコート建設と硬式庭球部の再興に尽力した。

まずは資金集めとして、工学部さらには塾監局に行きテニスコートの建設を懇願した。どちらも予算がないということだったが、塾監局の理事から「これでやりなさい」と財布からなにがしかの金額を寄贈されたという。

コート建設は、充分ではないながら掘り返し、炭殻敷き、荒木田盛り、整地を業者が行ったが、山室が声をかけて集まった学生たちは、ローラー引き、コート要所のマーキング、ネットポストの据え付け、周辺フェンスの建設などを行い 3 面のテニスコートができ上がった。

1949 年秋、機械工学科教授渡部一郎の指導のもとに硬式庭球部の活動が再開された。コート開きには体育会の硬式・軟式テニスのトップクラス選手たちの模範試合も行われた。渡部教授もそれに加わり、若者に劣らぬ華麗なプレーを披露された。

小金井初期の活動

コート使用の前にはローラーかけとライン引きがつきものだった。マーキング間に縄を引っ張り、それに沿って石灰液を箒様のものでラインを引くのに、きれいに引けると称賛を浴び、でき上がりが悪いとひんしゅくを買ったものである。冬は霜対策として、使用後にムシロでコートを覆う必要があった。

掲げた写真は、小金井での活動再開の当時の部員が集まったときのものであるが、当時はコート

小金井コート グランドと校舎を背にして

集合写真（10 期～12 期）

に出てくる頻度の高い人が部員と考えられて、特に限定されたものではなかった。練習時間も決まっておらず、授業や実験の合間を利用して、ときには練習相手を強引に窓から誘い出し、試合に備えて練習していた。それでも数名が集まって毛布とムシロを持って小金井の校舎に泊まり込み、1泊2日の合宿を行った。また、軽井沢での合宿を企てて行ったところが雨で流れ、翌日は一転晴れ上がったので浅間山登頂を果たしたのはよいが、帰京して1週間ばかりで噴火の報を聞いて肝を冷やしたこともあった。

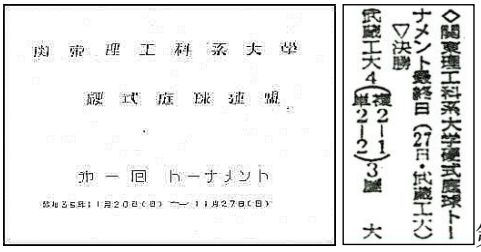
藤原銀次郎翁誕生日

藤原銀次郎先生は、工体各部部員をまるで自分の孫のように大変可愛がって下さっており、毎年先生の誕生日には、硬式庭球部部員は他部の同期と連れ立って先生宅に参上し、お祝いをしていた。

鎌倉合宿の思い出

1956年3月、合宿が鎌倉の市営コートで行われた。霜で表面が上がってしまったコートを吉本(17M)他がローラーがけ、ライン引きなどの整備をした。宿は由比ガ浜のユースホステルで、素晴らしい環境だった。吉冨(15M)、吉井(15M)、小笠原(16M)らが合宿を統率した。体育会にコーチの派遣をお願いしたところ、体育会庭球部在籍の桜井氏が派遣された。コーチは、まずは面をフラットに当てることを指導されていた。参加部員の一人であった今井(17M)は「とても判りやすい指導で凄く勉強になった。今でも克明に覚えているよ」と言っている。

藤原先生のお屋敷にて(1951年6月)


関東理工科系大学
硬式庭球連盟
第一回 トーナメント
◇関東理工科系大学硬式庭球トーナメント最終日(27日・武蔵工大)
▽決勝
武蔵工大4(複2−1 単2−2)3慶大

第1回トーナメント冊子および当時の新聞記事
(1960年11月28日 報知新聞朝刊号)

部員の増加

1957年には 工学部テニス部の歴史的人物の一人である渡部康一(18M)、大隈(18E)、紅一点の田口(18C)、その他18期生が入部した。女子部員は硬式庭球部創部以来初めてであった。17期部員も大分上手に球を扱えるようになり、さらに渡部、大隈が高校時代からのプレイヤーであったため、対外試合に耐えうる部員が大分揃ってきた。そこで、対戦相手の大学の範囲を広げることができるようになり、国際基督教大学、学芸大学、成城大学と対抗戦をした。国際基督教大学戦では、留学中であったロックフェラーⅢ世とも対戦した。19期では、坂部(19M)、片岡(19C)など高校時代から活躍していた名選手も入部し、その後の硬式庭球部の発展・実力向上に大きく貢献した。

理工科系連盟設立

1960年、関東理工科系大学硬式庭球連盟が設立され、慶應義塾大、東京農工大、電気通信大、東京農業大、武蔵工業大(現・東京都市大)、東京理科大、東海大、早稲田大の計8校で初のトーナメントが行われた。慶應は決勝まで進んだが、3−4で武蔵工大に惜敗した。

富士宮・四万温泉合宿の思い出

1961年の富士宮合宿は比較的天気に恵まれ密度の濃い練習ができたが、コートのすぐ側にトラックがあり、試合に負けると負けゲーム数だけ走るはめとなった。1962年からの四万温泉合宿は雨の日が多く、コートの雑巾がけ、室内でのトレーニングが多く、挙句の果てすることがなくなり、余興大会を開いたこともあった。

合宿の余興でフラダンスを踊る部員

26 期集合 小金井コートにて

ラケット

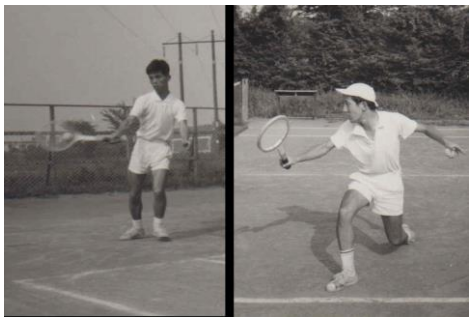
フレームの木は 5〜7 枚の合板で雨に弱く、アンバランスなガットの張力でも変形するため、プレスをはめて保管していた。木製ラケットは、現在のカーボンファイバー製よりも面が狭く、全長にラケットの最大幅を加えると規定のネット高さに相当し、ネット高さの調整には極めて便利であった。ガットはナイロン製が主流になりつつあったが、高価なシープ製のガットも使われていた。

プレースタイル

当時は面をフラットに使い、下から上にスイングしてドライブをかけるフォアハンドや、面をわずかに傾けてカット気味に打つスライスのバックハンドがオーソドックスなスイングとされていた。バックもむろん片手打ちであった。

女子部創設

1963 年、3 年生であった尾本（23C）の声掛けのもとに、女子部が創設された。きっかけは実験の合間の時間つぶしであった。当時、校舎の周りには喫茶店一つなく、実験の合間の時間をつぶせるところがなかった。そこで、男子にまざって工学部同期の女子皆でテニスを始めた。皆といっても、同期の女子は全員で 9 人の少人数であった。テニスは全くの初心者であったが、男子部員がとても上手く、どんな球を打っても的確な場所に返球してくれていた。他校との試合も行い、女子部員のいる東工大や理科大と対戦した。



木製のラケットを使ってプレー（1964 年頃）

部誌

1965 年 6 月、部誌の創刊号が発行された。内容は、新入生を迎えての主将の挨拶文、前年度の行事や対外試合結果などの活動報告、OBOG による寄稿文、在校生の作文、最後に現役・OBOG の名簿など、60 ページほどの充実したものだった。

その後 5 年間で計 5 冊の部誌が発刊されたが、以降、部誌は発行されていない。2013 年現在では、「矢上会報」という OBOG 会報が年 2 回発行されており、現役幹部部員の挨拶文、リーグ戦結果などの活動記録としている。

栄光の 4 連覇と葛藤

1965 年から 1968 年にかけて、理工科系リーグにおいて 4 連覇を果たし、栄光の一時代を築いた。しかし、この頃の硬式庭球部にはいくつかの問題

1965〜1970 年の部誌の表紙

もあった。まず、コートが小金井キャンパスにあったのに対し、学部 1 年生は日吉キャンパスに在籍しており、硬式庭球部への入部は学部 2 年生からで、実質 2 年間しか活動できなかったこと。また、いわゆる“体育会的”な部が理工系リーグにも現れ始め、対外試合で非常に苦しめられるようになったこと。この頃から、“工学部的”な部の運営に疑問と危機感を部員が抱くようになった。

工学部の性質上、他大の体育会のような練習量を確保するのは無理な話であったが、“勝利”を第一の目標に据えて厳しい練習を行うか、“まとまり”を優先して活動に取り組んでいくかが常に運営陣を悩ませていた。1969 年から、日吉キャンパス在籍の学部 1 年生にも勧誘を行って入部をさせ始めたが、チームの和をとるのは容易ではなく、その秋のリーグではついに王座を手離すこととなった。この葛藤のさなか、1972 年に工学部が矢上に移転された。

矢上移転後

慶應矢上庭球会(OBOG 組織)設立

かつて共にプレーしたOBOGと現役部員が試合をしたり旧交を温める機会が少なかったことから、1980年春、小俣（40S）が中心になり、金子（35C）が渡部部長（18M）および学校側の了承を得て、OBOG会の設立が企画された。

1980 年 5 月、横山（12E）、金子、小俣、今井（41C）、松田（41M）、安達（42I）が横山宅に集まり、OBOG 会設立準備会が開催された。その後の数回の会合に加え、卒業後も後輩を指導していた隅田（28C）、長澤（29E）、赤沼（29A）、紅一点の尾本（23C）を含めた会合で規約や行事等がまとめられた。その結果として、正式の会の発足を前に、小金井のコートで約 40 名の OBOG を含めたプレ OBOG テニス会が開催され、帰途に吉祥寺で設立の祝杯があげられた。OBOG 会の設立により、合宿への OBOG の参加や、5 月のテニス会等の行事が定例化された。OBOG 会の愛称は 1983 年に「矢上会」と決まったが、理工学部体育会先輩団体の設立に伴い 2008 年より「慶應矢上庭球会」に変更された。矢上庭球会はさまざまな現役支援を行っている。

矢上杯寄贈者 横山（12E）を囲んで（2011年12月）

また、2006 年より学部 1 年から修士 2 年までの現役学生の部内トーナメント戦の男女シングルス優勝者に対し、矢上杯が贈られることとなった。

理工学部オープンダブルストーナメント

矢上のコートは、理工学部の共用施設である。それにも拘わらず硬式庭球部が多くの時間帯にコートを利用できるのは、これまでの硬式庭球部によるコート整備・管理による功績が大学当局に認知されているためである。このような状況の中、硬式庭球部が優先的にコートを利用できることへの謝意を広く示すことが重要との認識から、理工学部の関係者に喜んでもらえる交流大会を目指し、1981 年のリーグ戦終了後に理工学部オープンダブルストーナメントが企画、開催された。

初代部長であった渡部一郎名誉教授、二代目部長であった高梨健吉名誉教授より男子部・女子部の優勝カップをいただき、名称はそれぞれ渡部杯・高梨杯となり、現在まで引き継がれている。

理工科連盟二軍戦の創設

テニスは本来個人スポーツであるが、チームのみんなに応援されながら戦う団体戦の魅力は格別のものである。しかし、通常は、チームのトップ選手以外の選手や初心者から地道に努力を続ける選手には、団体戦を戦う経験はあまり得ることができない。そこで理工科連盟において、リーグ戦に出場していない選手を対象とする二軍戦トーナメント大会が、1984 年春に当硬式庭球部の部員が中心となって企画、開催された。この大会は、常に努力しているすべての部員の希望となり、また、若手が伸びるチャンスにもなっている。

監督制度

矢上移転後の技術強化として、1983 年に監督制の導入が始まった。「テニスの指導だけでなく、人間的教育や OB の取りまとめをやってもらえる人柄の人を監督にしては?」という発案があったが、現役の社会人からの人選は難しく、当時修士 1 年生であった松田（41M）が初代監督を 2 年間務めた。その後、勝田（28I）が会社員で多忙を極める中、自ら監督の座に就き 2004 年に急逝するまで献身的な指導をした。この間、1990 年に一部優勝を果たしている。この後、2009 年まで宮原（56A）が尽力し、現在は五味（63SD）へ受け継がれている。

第二期黄金時代

監督制度が功を奏し、1980 年代後半にはチーム力が盛り上がってふたたび栄光の時代を迎えた。1986 年に松澤（46K）が率いて関東理工科リーグで武蔵工大（現・東京都市大）に 5－4 で勝利し、一部復帰を果たすと、1990 年には 22 年ぶりに一部優勝の栄冠に輝いた。ライバル校は関東学生本戦出場選手を擁しており、ハイレベルな試合が繰り広げられた中での勝利であった。

この年代には、個人戦トーナメントにおいて活躍した選手も数多く、男子シングルスでは林（47A）が 1987 年に準優勝、1988 年・1990 年に優勝し、女子シングルスでは福本（47C）が 1987 年に準優勝した。男子ダブルスでは、青木（46M）・林（47A）組が 1987 年優勝、鷲見（50C）・田渕（51M）組が 1990 年・1991 年優勝などの輝かしい記録を残している。

早慶 OBOG 会（勝田杯）

毎年 11 月頃に矢上コートにて開催されており、当硬式庭球部および、早稲田大学理工庭サークルの OBOG が一同に集まり、テニス対抗戦および懇親会を行っている。早大理工庭も理工科連盟に所属しており、現役同士もたびたび対抗戦やリーグ戦で対戦している、古き良きライバルといえる。当硬式庭球部の元監督であり、早慶 OBOG 会の運営に尽力した勝田は 2004 年に帰らぬ人となったが、その功績を称え、2005 年よりテニス会の勝者に勝田杯が贈られることとなった。

早慶 OBOG 会集合写真 矢上コートにて

早慶 OBOG 会で振る舞われる名物・鴨鍋

防風林の造成（山室防風林）

2004 年、矢上のコート周辺に防風林が植樹された。小金井キャンパスのテニスコート建設に努めた山室の功績を讃えて、山室防風林と名づけられた。防風林はテニスコート及びコート脇駐車場の南西に一列に植えられ、成長を続けている。

砂入り人工芝コート実現への歩み

2009 年 1 月、クレーコートに代わり矢上台に砂入り人工芝コートが完成した。この背景には、「もっとテニスをしたい」という純粋な気持ちがあった。かつての矢上テニスコートは水はけが悪く、雨が降った後数日間はコートが使えないという状況が頻繁にあった。加えて、数十年に渡るコートそのものの劣化が深刻で、現役らが日々鍛錬を行うための環境は十分ではなかった。そこで、な

山室防風林（設置 1 年後、2005 年 9 月）

砂入り人工芝化された矢上コート

んとかして良い環境で練習をしてもらいたいという OBOG の強い思いから、「砂入り人工芝コート化」の話が進んでいった。砂入り人工芝コートは、雨天時も使用可能であり、練習時間が増加すると同時に、日々の管理のためのコートローターやブラシなどの器具備品や補修・維持管理の経済的・人為的負担が削減されるというメリットがあった。現役と OBOG の幾度もの話し合いを経て、2006 年 12 月に慶應義塾に申請書を提出し、約 2 年後、さまざまな方の協力を受けて、ついに砂入り人工芝コート化が実現した。

矢上庭球会からは、塾を始めとする多くの方々への感謝を込めて、コート脇に時計台を寄贈した。砂入り人工芝コート化によって現役は練習により集中できる環境を手に入れ、その甲斐あって、近年、現役は好成績を収めている。

大懇親会

2009 年に創部 60 周年および砂入り人工芝コートの完成を記念して、OBOG、現役が一堂に会する大懇親会が初めて開催された。

創部 60 周年記念大懇親会
日本青年館ホテルにて（2009 年 3 月）

コート脇に設置された石碑

この第一回の大懇親会は大変盛況であった。以後、4 年に一度開催することが決定された。2013 年 3 月に、日吉キャンパス生協食堂にて第 2 回が開催された。

石碑　「練習ハ不可能ヲ可能ニス」

テニスをこよなく愛された元塾長小泉信三先生は体育会庭球部に「練習ハ不可能ヲ可能ニス」という言葉を贈られ、その言葉が刻まれた石碑が蝮谷コートを見守っている。2012 年、矢上庭球会では、男子部・女子部ともに 1 部に復帰したことを機に、現役部員とのつながりを強める活動の一環としてモニュメントの設置が企画された。塾当局および小泉家の了承を得て、2013 年 7 月、矢上台テニスコートに蝮谷と同様の石碑が設置され、現役部員の活動を見守っている。

現役の活動状況

年間行事

4 月	新入生勧誘　オリエンテーション
5 月	OBOG 会
8 月	夏合宿（山中湖村）
	個人戦トーナメント
10 月	リーグ戦
	引退式
11 月	新人戦トーナメント
	早慶 OBOG 会
2 月	二軍戦
	理工オープントーナメント
3 月	春合宿（白子町）

平日練習・休日練習

「文武両道」の精神の下に、平日は始業前、授業の合間および放課後に、コートでの義務練習や筋力・持久力トレーニングを行う。休日は、毎週土曜日に全体練習を行う。OBOG による技術指導、ミーティング等。日曜日には他大学との対抗戦を行い、日頃の練習の成果を発揮する。

OBOG テニス会

OBOG 会は、毎年 5 月最終週の日曜日に開催。矢上コートおよび蝮谷コートにて、当硬式庭球部 OBOG によるテニス会および懇親会を行う。

現役の大会記録

関東理工科リーグにおいて、近年の現役が優秀な成績を収めている。

男子部

2006 年に小松（66M）を中心に 4 部優勝 3 部昇格。2007～2010 年は、3 部での戦いに苦しみ、紙一重の惜敗が続いたが、2011 年に林（71E）のもと 3 部優勝 2 部昇格し、2012 年に本勝（72SD）たちがついに 2 部優勝 1 部昇格を果たした。林は 2 年連続昇格の功績により、学部卒業時に藤原賞を受賞した。

女子部

2005 年は 5 部に在籍していたが、長谷川（65SD）が率いて 5 部優勝 4 部昇格を果たすと、2 年間主将を務めた田中（67A）が勝ち頭となり連続優勝し、2 部まで昇格した。2010 年には本田（70K）が率いてついに 2 部優勝、17 年ぶりの 1 部昇格を果たしたが、2011、2012 年はともに 1 部準優勝で、女子の一部優勝は未だに一度も達成されていない。

男子 1 部昇格 東工大大岡山コートにて
（2012 年 10 月）

2012 年度 関東理工科連盟リーグ戦

2012 年度のリーグ戦では、男子部 2 部優勝 1 部昇格、女子部 1 部準優勝という好成績を残した。男子部は念願の 1 部復帰を果たし、ついに男女ともに 1 部優勝を目指せるところまできた。

2012 年度 関東理工科連盟リーグ戦結果
男子 2 部結果

		慶應大	都市大	北里大	農工大	総合
1位	慶應義塾大		4－⑤	⑥－3	⑦－2	2勝1敗 (+7)
2位	東京都市大	⑤－4		3－⑥	⑧－1	2勝1敗 (+5)
3位	北里大	3－⑥	⑥－3		⑤－4	2勝1敗 (+1)
4位	東京農工大	2－⑦	1－⑧	4－⑤		0勝3敗

1 部入れ替え戦：慶應義塾大 ⑥－3 東京工業大

女子 2 部優勝・1 部昇格（2010 年 10 月）

女子１部 結果

		東邦大	慶應大	北里大	明治大	総合
1位	東邦大		③－2	③－2	DEF勝	3勝0敗
2位	慶應義塾大	2－③		⑤－0	DEF勝	2勝1敗
3位	北里大	2－③	0－⑤		DEF勝	1勝2敗
4位	明治大	DEF負	DEF負	DEF負		0勝3敗

※関東理工科連盟リーグは、男子 13 部、女子 12 部まである。（2013 年現在）

1 部入れ替え戦で戦う関井（71J）（2012 年 10 月）

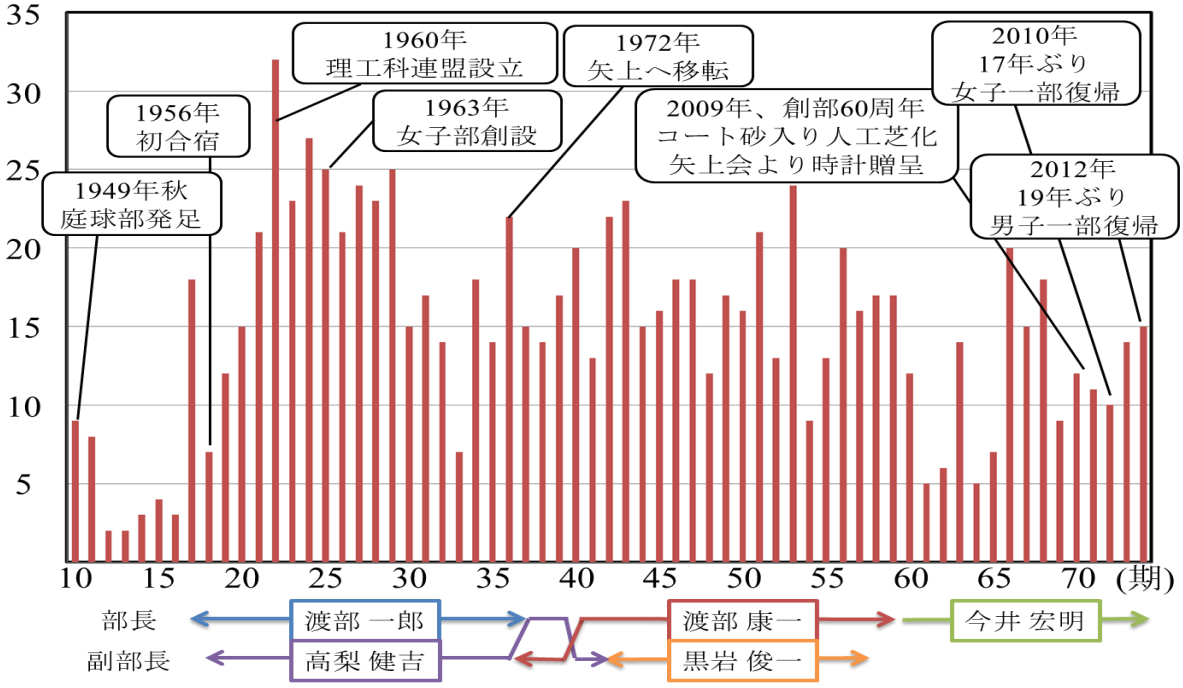
男子1部昇格の裏側

～東京工業大学との因縁～

1982 年のリーグ戦において、当硬式庭球部は東京工業大学の大岡山コートにて行われた入れ替え戦で東工大に敗退し、2 部に降格した過去がある。また、2010 年にも、3 部優勝をかけた試合で東工大に敗退。さらには 2011 年 2 月の二軍戦でも、東工大に準決勝で惜敗してしまった。このように、当硬式庭球部は、過去の重要な場面において、東工大に幾度となく敗戦を喫してきている。

2012 年 9 月、リーグ戦初戦の一週間前、前哨戦として東工大との対抗戦が行われた。全試合苦戦を強いられながらも、8－1 で慶應が勝利し、現役一同は 2012 年のリーグ戦での 1 部昇格という目標達成に向け、大きな手ごたえを感じていた。

勢いをそのままに、リーグ戦にて 2 勝 1 敗、勝利試合数で他チームに勝って 2 部優勝を果たし、10 月 27 日、入れ替え戦の日を迎えた。相手はまさに東工大、会場は大岡山コートであった。

因縁の相手・会場とはいえ、9 月の対抗戦の結果より、全員が勝利を確信して試合に臨んだ。ところが、降格の危機に面して必死な東工大選手のホームコートの利を生かしたプレーに、慶應は苦戦を強いられた。勝利を見込んでいた試合さえ落とす事態も起こり、現役一同は、リーグ戦で勝つこと難しさを改めて思い知ることとなった。しかし、気持ちを切り替え、選手は必死のプレー、選手以外も仲間を信じて応援を精一杯行い、徐々に流れが慶應に傾いた。最後には、6－3 のスコアで勝利を掴み、1 部昇格を達成した。当硬式庭球部の男子の 1 部昇格は、実に 19 年ぶりであった。

硬式庭球部 部員数の変遷とおもな歴史　※10期：1948年入学